

上智大 2021年度一般選抜の新制度を公表

河合塾

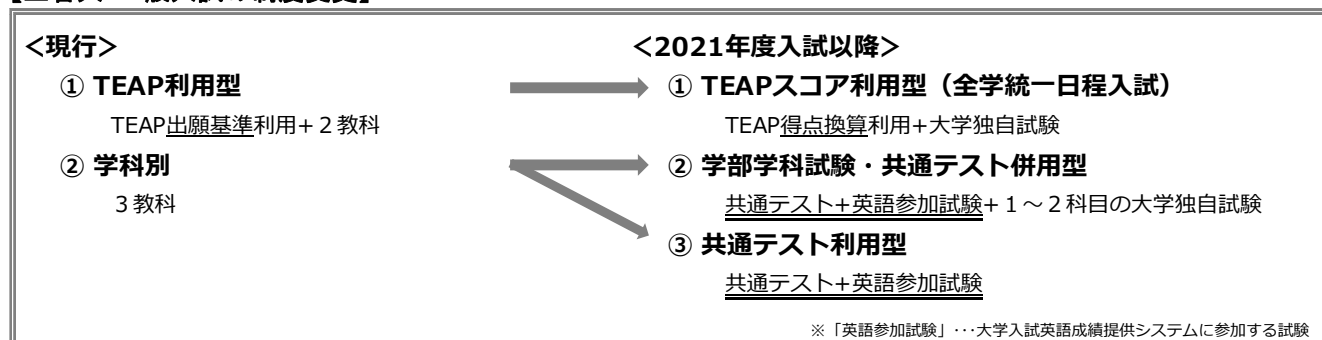
2018/12/11

このほど、上智大は2020年度に実施する2021年度入試の一般選抜概要を公表した。入試制度の異なる国際教養学部を除く全学部・全学科において、一般選抜の制度を一新するとしている。大きなポイントは、「大学入学共通テスト」（以下、「共通テスト」）を利用する選抜方式を新設することと、全方式において英語4技能を測定するために英語外部検定試験の結果を活用することの2点である。以下で詳細をお伝えする。

■2021年度一般選抜は3方式で実施

上智大は、2021年度一般選抜の概要として、以下の3つの方式を実施するとしている。

【上智大 一般入試の制度変更】



現行の入試制度では、一般入試は英語4技能評価を取り入れた①「TEAP利用型」と、大学独自の学力試験による選抜を行う②「学科別」の2方式である。2021年度入試からは、「学科別」に代わって、共通テストを利用する入試を2方式新設する。これにより、すべての方式において英語4技能を評価する入試となる。

現行の①「TEAP利用型」は、2021年度入試より「TEAPスコア利用型」となる。事前に受験したTEAPまたはTEAP CBTのスコアのほかに、大学独自試験の結果を総合的に評価する選抜方式という点に変更はない。ただし、TEAP（CBT含む）のスコアは出願基準としての利用から、得点に換算しての合否判定利用に変更となる。現行の出願基準としての利用では、英語が極めて得意な受験生でもその能力が評価に反映されなかったが、得点化することで英語の能力に応じた得点差が出る入試にするという。

一方、新たに共通テストを利用する入試方式は、②「学部学科試験・共通テスト併用型」、③「共通テスト利用型」の2方式である。いずれも、共通テストの成績に加えて、大学入試英語成績提供システム参加試験（以下、「英語参加試験」）の結果をCEFRレベルごとに得点化して合否判定に利用するとしている。このうち②の併用型では、独自試験について記述式を含む思考力を問う出題とし、文章理解力、論理的思考力、表現力等を総合的な学習到達度を測定するとしている。具体的には大問が2～3問出題する形を想定しており、英語での出題や数理的センスを問う問題など学部の特徴に応じた内容とすることを検討中としている。また、③の共通テスト利用型は地方からの受験生も集めるために、共通テストと英語参加試験の成績のみで合否判定を行うとしている。なお、入試科目は国立大受験者層も意識して4科目程度を検討しているとのことだ。

■出願要件として「主体性」「多様性」「協働性」に関する経験、資格・検定等の提出を求める

上智大は2021年度一般選抜の概要に加えて、出願要件の追加についても公表した。2021年度入試からはWeb出願時に、高校生活において主体的に取り組んだ活動の成果や、留学・海外経験、取得した資格・検定などの提出が出願要件として求められるようになる。ただし、得点化はせず、入学後の学生指導、高大連携に資するための参考資料として活用するとしている。

すでに早稲田大、慶應義塾大が、入学後の教育の参考資料として活用するために「主体性」「多様性」「協働性」に関する経験の提出を出願要件に追加するとしており、上智大もそれに続いた形だ。今後も同様の出願要件を課す大学が現れるのではないだろうか。